



Puzzle文集 7



# 目次

初恋 . . . . .	1
立ち上がれプレーリー . . . . .	2
彼女の列車、彼女の駅 . . . . .	4
愛はズボン . . . . .	6
キッズ嗚呼オーライ . . . . .	7
同期会 . . . . .	8
メーデー . . . . .	11
ワイルドサイド . . . . .	13
わかんない . . . . .	16
みどりのおじさん . . . . .	18
ぼっきらぶう . . . . .	20
いま、火星に行きます . . . . .	22
チロリアンハット . . . . .	24
あおぞら . . . . .	27
凡人のパンク愛 . . . . .	28
痴れ者のパンク愛 . . . . .	29
三七歳 . . . . .	31
天国からたらい . . . . .	32
でかした . . . . .	34
莫迦にしたわけじゃないけど . . . . .	35
奥付	
奥付 . . . . .	38



## 初恋

「なんか面白いことねえかな」

俺は塊蔵の後頭部をひっぱたく。

「鏡でも見てこいよ」

横目に君を伺いながら、大袈裟に両腕を振り回して、廊下の向こうの便所へ指さす。君を笑わせたくて仕方がない。小麦色に日焼けした陽菜乃が太陽みたいに笑った。

女子なんて絶対に笑っていた方がいいんだ。でも、陽菜乃じゃないよ。陽菜乃なんかより深雪の方が絶対にいいんだって。俺は教室の隅で干からびている茶羽蜚蠊に目を落とす。陽菜乃の笑顔をかき消すためなら、その小麦色から肌色へとグラデーションのかかった首もとからあいつを突っ込んでやる。陽菜乃に眉を顰めていると、塊蔵が鼻を鳴らした。

給食のソフトメンは間違いない。俺はソフトメンを“田”の字に切り分けてから袋を開ける。四分の一ずつを汁椀に浸して一気に吸り上げる。一区画食い終える度にゲップを一つ。空っぽになった食器を見下ろしながら、明日の給食のことを考える。嗚呼、葡萄パン。思い出すだけでがっかりだよ。

昼休みになると大半の男子はグラウンドに飛び出して、サッカーボールを追いかける。その前にチーム分けだ。俺と塊蔵は同じくらいに下手糞だから、俺たちがジャンケンしてメンバーを指名していく。最初のジャンケンでは勝とうが負けようが、俺はクラスナンバーワンの加瀬君を指名する。そして、塊蔵はナンバーツーのモッチャンを指名する。誰がそうしろと言った訳じゃない。暗黙のルールってヤツさ。加瀬君がなんとなく塊蔵のことが嫌いだから。モッチャンがなんとなく加瀬君のことが嫌いだから。

いくら汗をかいたって午後の授業は気にならなかった。理科室に向かう途中、俺は視線を深雪の背中に突き刺して、振り返れと念じる。そんな俺の傍らで塊蔵はまた呟く。

「なんか面白いことねえかな」

一生言ってるよ。懸命に生きているニンゲンには面白いことなんて必要ないんだ。俺はとても忙しい。振り返れ振り返れと念じている。気配を感じた加瀬君が怪訝な顔で振り返った。鼻の横の大きなホクロを見たら、明日の葡萄パンが脳裏を過ぎる。現実引き戻された俺はため息を漏らす。なんで干からびた果物なんか食うんだろうね。

掃除の時間になれば、皆で椅子を机に重ねて教室の後ろへと片づける。塊蔵は教室の半面に万能箒を滑らせてゴミをかき集めはじめた。俺は教室の隅でしゃがみ込み、ちりとりをかまえた。

「なんか面白いことねえのかな〜♪」

ミュージカルの役者でも気取ってるつもりか、塊蔵は訳の分からない歌を口ずさみながら縦横無尽に教室を滑る。陽菜乃が太陽みたいな笑みを浮かべ、モッチャンは突進してくる塊蔵にリアアットを繰り出した。加瀬君は黒板消しを窓の外で叩きながら、二人のじゃれ合いに眉をひそめる。そして沢山のゴミ巻き取った万能箒が、ちりどりの前に運ばれてきた。

「なんか面白いことねえのかな〜♪」

まだ歌っていやがる。眉間に皺を寄せて顔を上げれば、それは塊蔵ではなく万能箒でスカイホッピングしているモッチャンだった。陽菜乃の笑い声が響き、俺は教室の隅に目を運ぶ。そこには黙ったままの茶羽蜚蠊。

「面白いことしてやろうか？」

俺は嫌らしい笑みを浮かべ、塊蔵は阿呆のように口を半開きにしたまま首を傾げた。続いて、ちりどりに押し込まれるゴミをとっさに避けて、教室の隅で茶色に光るあいつをすくい上げた。そして、徐に陽菜乃に投げつける。あいつは弧を描いて静かに宙を舞う。そして、軽くウェーブのかかった頭の上に着地した。とっさに首を振る陽菜乃からあいつが滑り落ちる。途端、太陽のような笑みが翳り、大粒の涙が流れ落ちた。そして、雷みたいな泣き声を教室中に轟かせた。

周りの視線が俺を刺す。塊蔵は目を丸めて俺を見下ろす。モッチャンは万能箒でスカイホッピングしたまま右往左往。加瀬君は俺から無言でちりどりを奪い取るとあいつをすくい上げて、ゴミ箱に放り込んだ。そして、女子たちが陽菜乃のまわりに人垣をつくりはじめた。

深雪はいない。

眉を顰める俺に塊蔵が鼻を鳴らした。

「おまえ、陽菜乃のことが好きなんだろ」

なんでそうなるんだよ。

それから何度溜息をついたろうか。

俺は窓ガラスに顔を押しつけて、ガラス越しにひしゃげた顔を晒す。

君を笑わせたくて仕方がない。

はやくしないと、俺はあの太陽のようなその笑顔を、思い出すこともできなくなりそうだ。

## 立ち上がれプレーリー

一度でいいから一人きりで動物園に行きたいと思っていたのだ。一度だけでいいわな。有給休暇をとってさ。昼間からアルコールを舐めながら、ふわりふわりと広い敷地を歩

き回る。季節で言えば、肌寒くなってきた秋頃がいい。陽が高くなるにつれて多少汗ばむくらいが調度いい。

閑散とした動物園。退屈そうに寝そべるライオンとかさ。獣臭に顔をしかめながら齧るアメリカンドックとかさ。

そして、俺はサル山の猿たちに声をかける。

「おはよう」

一匹くらい振り返りはしないものか。俺は声のトーンをあげる。

「おっはよお」

二匹の猿が俺を見た。いええい、俺の勝ち。

スーツの内ポケットにはスキットル。そいつを取り出して安物のバーボンを一口含む。そんなスタイルがいいだろう。シラケた動物園に相応しいだろう。草臥れたスーツ。襟元の汚れたYシャツ。ネクタイは締めない。俺のためだけにとった休暇なのだ。日常とは少しでも離れたことをしたいだろう。一度もしたことがないことをしたいだろう。バーボンを舐めながらさ、退屈な動物たちと話がしたいじゃない。

「しかし、おまえは本っ当に可愛いな」

レッサーパンダには参る。俺はスキットルを握ったまま両手をあげた。

「おっ手上げえ」

毛の物としての完成度が高すぎる。

基本的に毛のない動物は好まない。そして、最後に見たのはプレーリードッグ。

「おまえも可愛いな」

アルコールが回ってきた俺は気兼ねなく声を上げる。

「可っ可愛いなあ」

しかし、何かがおかしい。

「ほら、立て立て」

結果から言えば俺の勘違いだった。

いくら待っても立ち上がりやしない。それに随分まるまるして可愛いじゃないか。形状としてはイタチに近いものと思っていた。スッと背筋を伸ばせばほっそりするものかしら。直立不動でキョロキョロ首だけ回す姿を待ち続けたが、いつまで経っても四つ足で忙しなく動き回り、時折、穴に潜る。

「それって、ミーアキャットじゃないッスか」

そう教えられたのは、後の同行営業で話のネタが尽きた時のことだ。沈黙を破るべく、プレーリードッグの話を持ち出せば、後輩社員に勘違いを一蹴された。

プレーリーなドッグとミーアなキャット。

「犬猫は一对のものとして認識してるんだな」

「プレーリードッグは鼠ッスよ」

他人の間違いを指摘することが生き甲斐なのだろう。

束の間の休日、俺はバーボンを舐めながら柵にもたれている。

「ほら、立て立て」

目尻を垂らしながら一体どれほど待ち続けたろうか。

## 彼女の列車、彼女の駅

優に二メートルは超えようという女が、体を折りながら列車に乗り込んできた。

彼女は俺の前に立つと、吊革に掴まって首を垂らす。そして、シートに座る俺を見下ろす格好になった。かすかな緊張感。毎朝のことだ。なにも彼女が俺に好意を抱いているわけではない。あと二駅すれば、俺はシートを明け渡して列車を下りる。彼女はそれを知っているのだ。その巨体をシートに沈めるため、彼女は今日も俺の前に立つ。

それに気づいた俺は、いつしか使命感を抱くようになった。彼女のためにシートを確保しなくてはならない。奇しくも俺の家は始発駅を最寄りとしていた。シートの確保は比較的容易であるが、かといって必ず座れるとは限らない。俺はその確度を上げるため発車二〇分も前からホームに立つようになった。彼女が乗り込むであろう車両の、その乗車位置の脇に立つこと一五分。列車を三本見送り、ようやく乗車位置の先頭に立つ。

そして、彼女の列車が現れると、俺はいつもと同じシートに腰を下ろした。ただし、毎日の座る位置は少しずつ違う。ちょっとした遊びだよ。列車が彼女の駅に到着すれば、彼女は前屈みにドアをくぐる。すると、真っ先に俺を捜すことになるだろう。目を合わせるなんてことはない。微かに首を振りながら俺を探す彼女の気配を感じている。

ある日、俺は思い立ち、有給休暇を取得した。それにもかかわらず、いつものように家を出る。いつものように二〇分も前から列車を待ち、いつもの車両に乗り込む。そして、その日はシートの端、入り口に一番近い場所へ腰を下ろした。列車が発車するとともに胸の高鳴りを覚えた。

彼女の駅に到着すれば、いつもの異様に大きな人影。彼女はその小さな乗車口に不満を言うでもなく、ラーメン屋の暖簾を割るようになり込んできた。彼女は入り口すぐに俺を見つけ、乗車して二歩でその前に立つ。そして、いつものように吊革を掴んで俺を見下ろした。俺は俯いたままほくそ笑み、そして小声で呟く。

「今日は下りないよ」

二駅先にたどり着いても、俺は下りない。そうと決めていたのだ。

シートに座る俺。その前に立つ彼女。二駅分を列車に揺られ、俺から彼女へシートが渡される。それが俺と彼女の全てだ。碌に目を合わせたこともない。まして声など聞いたこともない。毎朝、二〇分も前から駅に立ってシートを確保していることなど、彼女は知る由もない。この関係が壊れたとき、彼女は何を思うだろうか？ 身長は優に二メートルは超えようという女。俺を見下ろしながらかすかな緊張感を与える女。だから、俺はこんなことをするのだろう。

ところで、彼女は毎朝俺を見下ろしながら何を思うのだろうか。あと二駅、首を折りな



がら立っていれば座れるわ。考えているのはその一点だけだろうか。いつも見下ろされている彼は何を思っているかしら。気になったことだってあるだろう。まさか、毎朝大女に見下ろされている男がその存在に気づいていないとは思わないだろう。

お互いその存在に気づいていながら一言も口をきかない。それは異様な状況とも言える。毎朝目の前にいるのなら、笑顔で会釈の一つも交わすべきだろう。

「いつもすみません」

「いえいえお気になさらず」

なんて挨拶があってもいい。いつもすみません。そうだろう。そんな一言があっても悪くはないぞ。俺は彼女のため、毎朝、発車二〇分も前からホームに立つ。彼女が乗り込むであろう車両の、その乗車位置の脇に立つこと一五分。列車を三本見送り、ようやく乗車位置の先頭に立つ。そして、彼女の列車が現れると、俺はいつもと同じシートに腰を下ろすのだ。

「でも、勝手にやってるんでしょう？」

彼女の声が聞こえた気がした。

「わざと違うところに座ったりして、どんな趣味してるわけ？」

聞いたこともない彼女の声がせせら笑う。俺は下唇を噛んで眉間に力を込めた。

車内アナウンスが流れ、列車が減速をはじめた。俺は決して譲らないという意思表示をすべく、腕を組んでシートの背もたれに倒れ込む。その拍子に上目遣いに彼女を見た。彼女は首を垂らしたまま瞳を閉じ、湿った眉を震わせている。刹那、腹の底から使命感がこみ上げた。俺は反射的に立ち上がり、両手を斜め下へシャンと伸ばしていた。

「どうぞっ」

彼女は長い睫毛の割に細いその瞳を潤ませていた。

「いつもすみません」

そして、首を垂らしたままちょこんと膝を折る。

「いえっ」

その大女の仕草がとても可憐で、俺は列車が停車してドアが開くなり小走りにホームへ飛び出していた。

列車が滑り出すと、シートに横並びになる乗客のうち彼女がひときわ大きい。その目には安堵の表情、それを見届ける俺に目を向けることもなく、彼女は揺られて消えた。

俺は己の愚かさを恥じ、結果的に使命を果たせたことにホッとする。ゆっくりと息を吐き出して辺りを見回すと、そこは見慣れぬ光景が。

「あ」

そこはいつもより一つ手前の駅だった。

## 愛はズボン

お、「I was born」。

ブックオフで購入した一冊にあんたが引用されていた。俺の頭にこびりついて離れないウスバカゲロウの下りはあんたの一節だったんだ。

ウスバカゲロウには口がない。正確に言えば、全く退化して食物を摂るに適しない。それを知ったのは理科室の顕微鏡ではなく、国語の教科書だった。何も食わない。ただ連鎖を絶やさぬために成虫になる。

だって、それが生命じゃん。

その潔さは受け入れがたい。気味が悪い。「I was born」をはじめて読み聞かされたのは小学生だった。体の中に沢山の卵を抱えながら飲まず食わず。非道いよ。トラウマだよ。

散文詩に呑み込まれた俺は薄馬鹿下郎に変態する。

坊主頭を寄せ合う二人の大きな目玉が拡大鏡に映し出された。卵だけは腹の中にぎっしり充満していてほっそりした胸の方にまで及んでいる。内から外から俺を襲う圧迫感。全く退化して機能しない口をモゴモゴ動かし不満をたれる。ゆっくりと呼吸する。エネルギーの消費は極力抑えたい。

息をつく。グルコースが代謝され、アデノシン三リン酸が放出される。成虫になってからこれまで絶食を続けてきたのだ。糖質なんかはすぐに枯渇した。すでに筋肉の分解がはじまっている。糖新生からエネルギーを得なければ生きていられない。俺は痩せ細る。生きる為に痩せ細る。息する度に痩せ細る。

天上からは飽きもせず俺を見下ろす巨大な目玉。涙で潤んだそれは白黒のコントラストが美しいじゃない。幼虫だった頃を思い返し、勇ましい顎を突き上げる。小僧の目玉くらい一突きにしてえぐり出してやれるのに。

新鮮な目玉をエネルギーに変えて羽を広げる。そんな想像には及ばず、俺の腹には無数の目玉。小僧の黒目が動くに合わせて腹の中の目玉たちがぐるりと回った。

「淋しい光りの粒々だったね。」

小僧の声が響く。俺は全く退化して機能しない口をモゴモゴ動かす。全て俺であれと願う。俺の腹を引き裂いて飛び出す無数の俺。俺の殻を破って生まれる俺地獄。高床式の社殿の床下なんか穴を掘って顎を突き出す俺地獄。足を滑らせた俺を捕らえてエネルギーを蓄える。ついに変態した俺は再び顕微鏡の上。目まぐるしく繰り返される俺の生き死に。

「せつなげだね」

全く退化して機能しないこの口で、最大限の欠伸でもしてみせようか。

「I was born」 吉野弘より

## キッズ嗚呼オーライ

「親父死ぬかも」

親父が癌になった。直径一ミリの塊を内視鏡で摘めば治るんだって。それなのに俺は言ったんだ。だって、キムチが得意げに言うからさ。

「俺の親父さあ、三メートルくらいのところから落っこちて、骨やっちゃったんだよ」

両手で頭を庇ったら手首の骨がバラバラになったんだって。頭蓋骨にもひびが入ったんだって。

「知ってるか？ 骨折したらプレートを腕に差し込んでネジで止めるんだってよ。なんか手術後もスゲー痛いよ。くっついたら抜き取るらしいんだけど、それも痛いよ」

なんだよそれ。プレートを突っ込んでネジで止めるなんて、そんなのありかよ。俺は顔をしかめながらキムチの顔をのぞき込む。それでも、あいつは口をへの字に結んでスマホの画面にせわしなく指を滑らせる。

「よっしゃ、七コンボっ」

公園のベンチで背中を丸めながら小さな画面に目を向ける。自分の親父の災難を何でもないように話しやがる。その姿がなんだか得意げに見えたんだ。

「親父死ぬかも」

キムチは途端に手を止めて、俺に振り返る。一〇秒もすればスマホの画面は真っ暗になった。それでもキムチは口を半開きにしながら目を泳がせている。

「ごめん」

俺は沈黙に耐えかね口を割った。

「ごめん」

キムチは繰り返す。下手な冗談かと思って歯を見せると、キムチは眉間にしわを寄せた。

「ごめん」

俺は下唇を噛む。

「いいんだ。ただ、なんて言っているんだか」

キムチは上唇を器用に噛んだ。すると、いいタイミングでママが駆けてきた。滑り台を滑り降りてチョワーとか言いながら。

「マメちゃんは知ってるの？」

俺は大きく頭を振って、突進してくるマメを受け止める。

「お腹空いた？」

そう尋ねれば、答えは決まっている。マメは大きく首を垂れた。

「そろそろ帰ろうか」

「バイバイ」

マメがキムチに小さな手を振る。俺は誰にも目を合わせることもなく、マメの手を引いた。

だって、キムチが悪いだろう。あんな平気な顔で自分の親の不幸自慢をしておいて。なんで、俺の親父の話であんな顔するんだよ。なんで、急にいいヤツみたいな顔しやがって。なんで、公園でゲームばかりしているヤツが。なんでだよ。

「兄兄、痛い痛い」

手をピンと伸ばしたまま俺に引きずられているマメが情けない声を上げた。

「ごめん」

俺は歩みを緩めマメの手を離す。その小さな手は直ぐに俺の手を握り返してきた。俺はその手を振り払い。親指を突き立てて握り直す。そして、俺は親指でマメの親指を押しえ込んだ。

「イチニサンシゴロクナナハシキュジュツ」

「急にズルいい」

頬を赤くしたマメから笑みがこぼれた。自然と俺も笑顔になる。小さな親指は笑顔の発射ボタン。

「今度は競走だよ」

俺の返答を待たずして、マメは駆け出す。俺は大きく頭を振るって三つ数えてからその背中を追いかけた。

## 同期会

初めてここにやって来た時、俺たち同期組は男女四人四人の八人だった。でも、女たちは一人消え、二人消え、ついに残ったのは男四人。

最後に同期で席を囲んだのは、四人目の女が消える直前だった。薄ぼんやりと輝く女は、世界に不満を撒き散らしながら消えていった。こういうことがあるととても残念だよ。目が眩むくらいの満面の笑みで世界を見切ったように飛び出して欲しいと願う。でも、そんなヤツは滅多にいない。女四人は皆何かしらの不満や苦しみを抱えて消えていっ

た。

そんなことが続いてから、俺は能面を被ったようになって、笑うことも怒りを露わにすることも極力控えるようになった。

そんな俺が心の底から笑えたよ。

「未来はガタガタゴーじゃねえだろう。なんかシュイーンみたいなことにならんのか？」

久しぶりに同期会をしようなんてことになったきっかけは、偶然ホへと出くわしたことだった。

その日、俺は希少種の一二番を連れてラボに向かっていた。俺たちはもう絶滅が決定しているわけだが、やたらとY遺伝子が強いようで、増えはしないが絶滅が危惧される立場にはなかった。

カロリーメイトをかじりながらメトロに乗り込むと、ウィダーインを啜るあいつが運転席に座っていた。それを見つけたのは一二番だった。運転席を指さして彼女は言った。

「イロハニの同期の方じゃないですか？」

「本当だ。よく分かったね」

なんて言ってはみたものの、分からないはずがない。活発なプロリフェレーションとアポトーシスを繰り返す俺たちの細胞は常に入れ替わっている。全身からフツフツと音を立て、表皮は波を打ったように蠢いている。動的平衡が保たれた、こんな種族は俺たちくらいしかいない。俺はこの惨めな運命に苦笑いを浮かべた。

「イロハニも笑うんですね」

「笑った訳じゃない」

俺が眉を顰めると、一二番は目を細めた。随分と綺麗な笑みを浮かべる娘だ。続いて、一二番は運転席に目を向け、断りもなく指先で空気に波を立てた。その波動は真っ直ぐに運転席へ届き、窓ガラスを打った。運転席と言ってもメトロは自動運転だ。ホへ트는正常に動作しているかどうか見守るだけ。長生き以外に特長ない俺たちには碌な仕事が割り振られなかった。

ホへ트가振り返る。俺は微笑みもせず軽く手を挙げた。あいつは少しばかり目を見開いて俺たちを手招いた。ぼんやり立ち尽くしていると、一二番は再び波を起こす。俺の背中に衝撃が走り、滑るように運転席へ飛んでいった。

ホへ트는窓を開けて肘をかける。

「久しぶりじゃないか、イロハニ。なんだよそのシュイーンな動き」

「あいつのせいだ」

蠢くホへつの顔から目を背けて顎を一二番に向けると、一二番は得意げに微笑みながら指先を突き上げていた。

アンマリチカラヲツカイスギルナヨ

声にはせず口だけを動かす。いつも言っていることだ。一二番は舌を出して指先を引っ込めた。

「しかし、もう二一世紀だって言うのにこの列車はないよな。未だにガタガタゴーだ」

考えてみればイロハニと会うのは二〇世紀以来だ。

「二世紀って言えば、タイヤのない車がシュイーンのはずだったよな」

「今みたいな力を使えばいいんだろが」

「希少種の力をあてにしても、直ぐに絶えるだけだ」

「悲しいねえ」

長生きしか能力のない俺たちとどっちが悲しいか。言いかけた言葉を呑み込む。最近、湿った言葉を選びがちだ。

不意に視線を落とせば、すぐ側で一二番が見上げていた。

「私、一二番」

そう言ってホヘトに手を伸ばす。あいつは口元を歪めて意地悪く答えた。

「今度は俺を吹っ飛ばす気か？」

「まさか」

綺麗に笑う一二番の手を、ホヘトがキツク握った。蠢く手から一二番に高い熱を伝える。

「ねえ、イロハニ。あなたとてもいい顔してるわ。たまには同期で集まったらいいじゃない」

すぐさまホヘトが答える。

「いいね。同期会か」

それからの展開は早かった。すぐに一二番が店を予約して、俺たち同期にシグナルを送ったのだ。

「便利なもんだ」

だから、すぐに絶えるんだよ。

希少種をラボに届け、僅かな賃金を得ると、俺は一二番指定の居酒屋へ向かった。暖簾を割ると、既にホヘトが忙しなく箸を動かしながら杯を傾けていた。

「よう早いな」

「腹が減って死にそうだったんでな」

「死ぬ前に喰ってくれ」

つならない冗談ではない。活発な動的平衡を保つ俺たちは喰い続けなくてはならない。つまらない現実だ。

間もなく、チリヌルとオワカが現れた。恐る恐る店内をのぞき込む二人は、俺たちを見つめるなり直ぐに肩を落とした。

「なんだよ。お前等か」

「なんだよってのはなんだよ。不満か？」

「随分可愛らしい声で信号が届いたもんだからな」

俺が鼻を鳴らすと、ホヘトは言った。

「一二番って可愛くねえか？」

「なんだい。おまえ外人が好きなのか」

「こいつ希少種のボディガードしてるんだよ」

「そんなことしてるのか。大したもんだ」

「大したことはない。さあ、頼むぞ。呑んで喰って生きるぞ」

「現実的なこというなあ」

「今日は呑むよ」

「宵越しの金は持たないってか」

「死ぬぞ」

乾いた笑いが響く。

「ホヘトは何してんのよ？」

「メトロの運転士だよ」

「ガタガタゴーの見張りだろ」

「未来はガタガタゴーじゃねえだろう。なんかシュイーンみたいなことにならんの？」

繰り返される日中と同じ話題。俺は堪えきれず声を上げて笑った。ホヘトは肩を持ち上げ、チリヌルとオワカは目を見合わせて首を傾げる。

「よし呑むぞお」

俺は声を荒らげた。そして、宵越しの金は持たぬと決めた。

## メーデー

水飲まないと死ぬよ。

茶ではいけない。沸かした湯も駄目。焼酎を継ぎ足そうなんて以ての外。フィルターで濾過した水道水が一番。

でなきゃ死ぬよ。

そんな話、ほかから聞いたことがない。それでも、酷く喉が渴いて、左脳の側頭葉あたりが奇妙に疼くと不安が襲う。ペッコペコのペットボトルに詰まった水を五〇〇ミリリットル一気に飲み干す。それでも側頭葉は変わらず疼いている。

そして、俺は女房の言葉を思い返す。

水飲まないと死ぬよ。

やはり水道水をフィルターで濾過したやつでなければならぬか。

今日はメーデーだっていうのに午後から顧客との面会があった。無理に呼び出されたわけではない。こちらが受話器越しに頭を下げながら頼み込んだアポイントだった。

会社を買収されてから三年が経つ。事務所が変わるわけでも、上司が変わるわけでもない。その中で、わずかな変化の一つがこのメーデーの導入だった。年に一度のことだ。長年メーデーなんてものに縁の無かった俺に、そいつを定着させるのは、まだ時間がかかるようだ。そして、カレンダーが黒字だったということで、確度の低い商談を予定してしまったのだ。

もちろん会社には寄らず、家から直接、朝遅い電車に揺られて行った。近年の企業誘

致の中では比較的成功したと言われている産業都市。ついには地下鉄が伸びて、町が生まれた。

俺は改札を抜けると、地上には上がらず、そのまま真っ直ぐデパ地下へと突き進む。ひとまずフードコートに落ち着き、遅い朝食をとる。朝昼兼用のランチというやつか。すっかり全国を席卷した讃岐うどんを啜る。そして、レンコンの天ぶらを勢いよく咀嚼し、その歯ごたえを堪能する。

腹を八分に満たしたところで、女房の顔を思い返しながら紙コップ一杯の水を飲み干した。袖をめくって腕時計を覗けば、約束の時間にはまだ十分に余裕がある。

俺は立ち上がり、フードコートを後にする。そして、仕事鞆をゆらゆら揺すりながら食品売場を歩いた。赤飯、烏賊飯、筑前煮を通り過ぎると、油を通した肉の臭いが俺を魅了する。レンコンだけでは物足りなかったか。羽つき餃子も悪くはないが、いくつになっても男子を魅了して止まない肉料理の王道はやはり鶏の唐揚げだ。中でもマラカスのような形をした手羽元。それにしても、大皿に積み上げられたそれは一体何羽分に相当するのか。俺はひたすらに鶏を部位ごとに解体する屈強な男について考えてしまう。

タンパク質も摂らなければいけないよ。

女房はそんなことも言っていた。

でなきゃ死ぬよ。

否。それは死ぬほどの問題ではなかった。

タンパク質はそれほど大層な問題でない。とはいえ、これから休日を返上してまで獲得した商談を控えているのだ。具合を悪くしている場合ではない。

唐揚げの試食は許されないようで、俺は視線を辺りに泳がせる。そして、楊枝の刺さった焼豚を見つけた。そいつを摘んで、申しわけなさそうに口に運ぶ。美味。商談が成立した暁には、一本買って帰ることにしよう。

腹は八分に満たされた。水は飲んだ。多少のタンパク質も採った。準備は万端と、食品売場を出ようとしたところで、俺を呼び止めるものがあつた。甘さは控えめ、ほのかな塩味、目から入る情報だけで、唾液腺から溢れ出るものがある。

嗚呼、豆大福。

しかし、こんなスイーツに頬を緩めている場合ではない。日々は酒に向かって進んでいるのだ。目を覚ませば日暮れまでに一〇時間以上もあることにうんざりする。最低な気分から一日がはじまり、適度に仕事をこなし、多少の暇を持て余す。それでもなんとかやっていけるのは、酒が俺を待っているから。日が暮れば家に帰る。少年の頃から同じことの繰り返しだ。しかし、今では温かいシチューが待っていることはなく、そこには塩辛い肴と冷えた酒。俺は豆大福の誘惑を振り払い、勇んで客先へ向かった。

そして、土壇場でキャンセル。

結果、焼豚を買うことはなく、帰路につく。

憂鬱な気持ちを引き連れて、我が家の最寄り駅まで戻ってきた。ロータリーの向こうにはイオン系のマーケットがある。そして、こんな冴えない日を彩るに相応しいトップヴァリュエの新ジャンルビールを手にとった。レジに運べば、表示価格よりも大幅な額を請求された。安物買いほど八%の威力に驚かされる。

ダラダラと重い足を我が家へ運ぶ。そのまま帰っても良かったが、まだ日暮れまでに



は時間があった。随分早かったじゃない。なんて、これから展開される会話を思うと億劫になる。途中、公園に目をやれば誰もいない。まだ小学校も終わっていないのか。俺はその隅にあるベンチに腰を下ろしてブルタブを鳴らす。そして、呟いた。

「メーデー」

喉仏を揺らしながら空を見上げる。うっすら雲のかかったソーダ色の空。心地よい風。随分と清々しい陽気であることに気付く。誰もいないのをいいことに、天を仰いだまま大きなゲップを響かせる。そして、両腕を突き上げて、背もたれに背筋を反らせた。

「あんたなにしてんの？」

聞き慣れた声に、俺の身体は条件反射的に応答する。そして、張りつめた筋繊維の反動で俺は勢いよく上体を起こした。女房は俺の大きなアクションにほくそ笑みながら、俺の手に握られた三五〇ミリ缶を見つける。文句の一つでも言われるかと思えば、手に提げた鞆からペットボトルを取り出し、それを突き出した。

ラベルの剥がされたペットボトルの中で透明な液体が揺れている。

「水飲まないと死ぬよ」

俺はそれを受け取り、代わりに飲みかけの缶を渡す。すると、女は勢いよく喉を鳴らしながらそいつを飲み干した。そして、小さく舌を出して唇を舐める。俺はその一部始終を見届けてからペットボトルに口を付けた。

「ねえ？」

これから展開される会話を思うと億劫になる。

そして、もう一度呟いた。

「メーデー」

## ワイルドサイド

俺が生まれた家は、落下式、くみ取り式とも言われる、所謂ボットン便所だった。あの頃の排便といえば、慎重に足を延ばして便器に跨がり、カマドウマめがけて垂れ流すものであった。

そして、便所を出れば、煙に燻された台所。

「夕飯、塩焼き？」

「そうよ」

俺が大好きな鱈の塩焼き。塩を吹いて黒焦げになった皮をめくれば、うっすらと血管の走る真っ白な身が湯気をたてる。

俺はうれしくなって鼻歌を奏でる。Doo doo doo...

はじめて一人で暮らすようになったアパートは、便所と風呂が同居するユニットバスだった。どうしてそんなことが許されるのか、まったく理解ができなかった。排便後の風呂は、自分の産物とは言え、臭い立って耐え難い。かといって、風呂後の排便では何のための風呂だったか知れない。

そして、己に一八時以降の排便を禁じる掟を下した。

はじめての女はフロリダ州マイアミからやってきた。ヒッチハイクで合州国を横断しながら。西海岸からはおそらく筏で流れ着いたと思われた。隆々とした筋骨が物語る。

合衆国横断の最中、眉毛を引っこ抜き、足を脱毛して「彼」から「彼女」になったという。米国式のジョークだと思ふことにしたが、結局、真実を確かめる機会はなかった。

そして、彼女の鼻歌はいつだってバスバリトン。Doo doo doo...

ついに便所は尻の穴まで洗うようになった。尻で蓋をして用を足した後、尻を洗って流水で全てを洗い流す。便器を覗いたところで跡形もない。俺の尻からは一体何が出た？

「二一世紀」

そう呟くと、なんとなくため息がこぼれた。便所を出る俯き加減の俺を見て、女は言う。

「便秘？」

俺は首を振る。

「野菜食ってる？」

俺は首を振る。

「運動してる？」

俺は首を振る。

「だからよ」

「だから、便秘じゃねえって」

そして、女に跨がれば俺は落下式便所を思い出してしまう。カマドウマを思い出してしまう。

俺は、そいつを振り払うように鼻歌を奏でる。Doo doo doo...

可愛らしく乳を吸って、真っ白な便を垂らしていたおまえも、気が付けば、草を食い、肉を食い、酷い臭いを放つようになる。二〇世紀が帰ってきた。そんな感覚に包まれ、便所のカマドウマ、燻された台所が蘇る。

湿った布団の上で眠るおまえに添い寝して、汗ばんだ額をそっと撫でる。

「可愛い？」

女は俺を見下ろして微笑んだ。汗をかきながら不服そうな寝息を立てるおまえ。小さく動いた口が糸を引いた。額に接吻してから俺は応える。

「勿の論」

女は眉を奇妙に歪めて呟く。

「オヤジ」

大半のオヤジはオヤジを演じている。あえてね。そして、俺は仰向けに転がり、腹筋をはじめめる。

女は布団に膝をついて、おまえの髪を指でとく。

「変なパパね」

そして、女は子守唄にととも相応しい声で、喉を振るわせはじめた。Doo doo doo...

おまえはどこまでも暴走していた。一日限りのジェームス・ディーンを気取って。大量のヴァリウムを吞んで、そして、当然クラッシュした。

連絡を受けた女は、声を振るわせながらも、電話の向こうの声を完璧に反復した。俺は真っ赤な肉塊になり果てたおまえを想像する。その周りにはカマドウマが跳ねていた。

実際のところ、おまえは真っ白で清潔なベッドに縛り付けられていた。俺はおまえの横に腰をおろし、汗ばんだ額をそっと撫でる。うっすらと髭の生えた鼻の下を眺めていると、作り話でもしてやりたい気分になってきた。

「はじめての女はフロリダ州マイアミからやってきた」

「なんだそりゃ」

「ヒッチハイクで合州国を横断してさ。西海岸から筏で浦賀に流れ着いた」

「マシュー・ペリ子かよ」

「ペリ雄かもしれん」

「女だろう」

「合衆国横断の最中、眉毛を引っこ抜き、足を脱毛して「彼」から「彼女」になったんだ」

「ペリーがか？」

「ペリーがさ」

おまえは実にはいい顔で、痛いから笑わせるなど言いながら、声を漏らした。Doo doo doo...

女が逝くすぐ前におまえが死んだ。焼かれたおまえの骨は、空洞だらけのスポンジだった。そして、残された俺は締まりの悪い体に悩まされている。見知らぬ女にオムツを交換されて、いい気分がするはずもない。自分の産物に鼻をつまみながら、このままベッドで干からびていく己が不憫になる。

どうせ干物になるなら、太平洋の真ん中、筏の上でありたい。

まっさらなオムツに幾らか気分がよくなった。礼の一つでもしてやろうかと顔を見れば、真っ黒な顔した女介護士。

「ペリ子」

そんなはずがない。

「ナンデスカ、ソレハ？」

そして、彼女の鼻歌は心地よく響くバスバリトン。Doo doo doo...

## わかんない

それはなんだかとてもいい匂いがした。見た目は少しおどろおどろしいのに、とても具合のいい匂いだ。腹が減った時に鼻を寄せれば、肉の焼けた匂いがした。眠気に襲われた時には、うっすらと女の洗い髪のような香りが漂った。しかし、残念なことに見た目がよくない。だから、俺はきつく目を閉じる。柔らかな髪を伸ばしていたあの娘を思い浮かべる。お陰でよく眠れた。

翌朝、目を覚ませば、小豆を甘く煮たような匂いが立ち込めていた。そして、俺は思い立ち、湯を沸かして苦い茶を入れはじめた。湯飲みに沸いた湯を注ぎ、七、八〇度に冷めたところで急須に移す。一〇分だけ早く起きれば美味しい茶を啜ることができる。

すると、目覚ましをセットした時間より一〇分ほど早く目を覚ますようになった。ふっくら旨味のある小豆を炊いたような匂いが部屋を包みはじめる。そして、少しだけ時間をかけて茶を入れた。安月給の俺でもできる、ささやかな贅沢だ。お陰で職場へ向かう足取りも幾分軽くなった。

ある日、昨日とどこか様相の違うそれに気付いた。はじめは気のせいだと思ったが、特徴的に尖った部分を記憶しておいたところ、翌朝には少し丸み帯びたことを確認した。

俺の状況に合わせて、具合のいい匂いを放つのだから、多少見た目が変わったところで不思議はない。

ところで、それは預かりものである。

「それはなに？」

「わからない」

「わからない？」

「そうだよ」

旅に出る間だけ預かって欲しいと言うから、少し見た目は悪いが引き受けることにした。素敵なお土産でも持ってきてくれるのではないか。そんな邪な気持ちじゃなかったわけではない。

君が旅立ち、床の間にそれを飾ってみたところ、自分の気持ちが見透かされているようで、しばらく居心地の悪い思いをした。その時から、ただの静物ではないことにはなんとなく気づいていた。

一緒に過ごす時間が経つにつれ、その見た目の悪さも、なかなか具合がいいと思うようになった。少し怖いと思わせる様相も絶妙な匙加減だ。

猫の類は、見た目では言えかなり洗練されている。しかし、犬の類は、正直言ってそうでもないものがある。中には爬虫類を愛でる輩もいる。不細工さが故の愛らしさとい

うものがあるのだろう。きっと同じような感覚だ。

それには目のようなものがいくつもあった。何がなんだか分からないものに見られているような気がする。恐怖心をかき立てる一つの理由だろう。そして、尖ったものがある。一番上には乗り物のようなものもある。

「頭の上のやつ、UFOみたいだな」

応答はない。

話しかけたり、触れてみたりしたところで、何の反応もなかった。しかし、いつだって期待以上に具合のいい匂いを漂わせている。不格好なりにも少しずつ形を変え、それが愛らしいものと感じさせる。

ある日、夢を見た。

それは大きく膨れ上がり、異臭を放つ。俺は鼻をつまみ巨大なそれを齧めっ面で見上げていた。夢の中の出来事だから、どんな臭いだったかハッキリはしない。それでも俺は熟れ過ぎた南国の果実を思う。たくさんのウナギのように大きく滑らかな芋虫が、それから顔を覗かせ蠢いている。実際にウナギだったかもしれない。ウツボだったかもしれない。

酷い夢を見たのは、それが愛らしいものとも思いはじめた矢先のことだった。俺は目を覚ましてからしばらく呆然とした。そんな時でも、それは相変わらず具合のいい匂いを放っていた。俺は昨日とはまた少し様相の違うそれを眺めながら、思いがけず涙した。直向きな姿勢がなんともいじらしいじゃないか。それにもかかわらず、未だ俺はそれに怯えている。いつか豹変して俺に危害を加えるのではないかと疑っている。そんな自分の弱さ、貧弱な想像力に苛立ちを覚えた。

幾夜も同じ夢を見るようになった。そして、明るる朝には涙を流した。俺は何度も「ごめん」と呟き、次第に飯が喉を通らなくなった。それでも腹は鳴る。すると、それは焼いた肉のような臭いを放ち、俺をさらに惨めにさせた。

そのことをもっと理解したい。

苦悩し続けたある日、晴れやかな顔で君が旅から帰ってきた。

「お土産を買ってきたよ」

俺は横目にそれを伺いながら、言葉を切り出すタイミングを測っている。

「どうかしたの？ ちょっとやつれたようにも見えるが」

俺は大きく息を吸って、それを譲ってくれないかと言いかけた。刹那、それは微かに腐った南国の果実のような臭いを放つ。そこで俺ははたと気づいた。ここ連夜の悪夢は、別れが近いことを知ったそれが見せているのではないか。

君は大きな鞆を下ろして、その中を探りはじめた。

「気に入ってくれるといいのだけど」

そう言って取り出したものは、手のひらに乗る程度の小さなそれだった。俺は目を丸くしながらそれを受け取った。そして、手の上で小さく動いたようなそれを見ながら、高鳴る鼓動を感じていた。

## みどりのおじさん

そのおじさんは黄色のベストを羽織って黄色の旗を振っている。それでも「みどりのおじさん」と呼ばれていた。随分といい加減に旗を振ってはボクたちを横断歩道に渡す。大人に見張られているだけで安全に渡ろうという意識が芽生えるから、ある程度の効果はあるのだろう。

「へえ、珍しいわね」

ママは様々な小瓶が並んだ鏡台に向かったまま、それ以上の言葉はなかった。

確かに言われてみれば珍しい。みどりのおじさん以外に旗を振っているおじさんを見たことがない。そして、みどりのおじさんは毎日同じ交差点に立っていた。

ある日、ボクはおじさんに尋ねた。なんで毎日同じところで旗を振っているのか。おじさんは辺りを見回して、誰もいないことを確認すると、ボクの耳に顔を寄せた。そして、自分の息子がここで車にひかれて死んだのだと告げた。

「へえ、そんな話し聞いたことないわね」

ママは鏡台に向き合ったまま、妙な小道具で睫毛をつまんだ。言われてみれば聞いたことがない。

商店街で万引きする児童が多発して問題になった時、校長先生は全校集会で涙を流しながら大声を張り上げた。交通事故で児童が死んだなんてことになったら、校長先生は気絶してしまうだろう。

ママはいつだって正しい。そして、一言でボクが次にすべきことを示してくれた。

交差点に差し掛かると、みどりのおじさんはボクを見るなり頭を掻いて苦笑いを浮かべた。そして、こっちから尋ねるまでもなく白状した。

「昨日の話、ウソな」

「だよ。ボクの学校で万引きが流行ったとき、校長先生は全校集会で泣いてたよ。交通事故で誰かが死んだなんてことになったら校長先生は気絶しちゃうね」

「そうか。万引きはいかん。そんなことより、おまえ、ちょっと時間あるか？」

「ないよ。今すぐ駆け出したいところだ」

みどりのおじさんが言うには、いつだってボクが一番最後にここを通るそうだ。そして、ちょっと偉そうに、あと五分だけ早く家を出るようにと言った。

「じゃあ、そうしなさい」

ママは鏡越しにちらりとボクを見てから口紅を捻り出した。

「そうするよ」

いつだってママの言うことは正しい。言うとおりにしていれば間違いはない。我が儘言

わなければ、いつまでもボクのママ。パパがいなくなった時がそうだった。ボクの我が儘を許したママと許さなかったパパが喧嘩した。

「我が儘はいけないよ」

「どんなこと言ったんだ？」

いつもより早く横断歩道にさしかると、ボクは随分と余計なお喋りをしてしまった。何となく気付いていた。みどりのおじさんはボクに説教がしたくて五分早く家を出ると言った訳じゃない。ボクももっとお喋りがしたかったんだ。

「弟が欲しいって言ったんだ」

「そいつは厄介だな」

みどりのおじさんは少し困った表情をしながら、後ろからやってきた集団を横断歩道へと誘導した。ボクもなんだか気まずくなって、その集団と一緒に横断歩道を渡っていった。

翌朝、ボクはいつもの癖で化粧をするママの姿を見るけれど、何も話しかけることがなかった。そんなボクを察知したママは鉛筆で眉毛を書き足しながら、鏡越しに問いかけた。

「五分早く家出るのやめたの？」

「五分はちょっと早すぎるんだよ」

みどりのおじさんとのお喋りは二分程度がちょうどいい。そろそろかなと壁掛けの時計を見上げれば、針がグルグル回っていた。ウチの電波時計はあまり機能していない。時間を知りたい時には決まってグルグル回りながら調整をしている。いつまで経っても、時計のグルグルは止まらない。本当に時間が早回しになってたりして。そんなことを思うと、ボクは不安になって家を飛び出した。

通りに出ると、ランドセル姿が見あたらない。ボクは急いで歩き出す。そして、交差点に差し掛かると、みどりのおじさんが立ちほだかった。

「通してよ。車なんていないだろう」

「五分早く家出るのやめたの？」

こういうのなんて言うんだっけ？

デジャブって言葉を探していると、みどりのおじさんは思いもしないことを口にした。

「俺が弟になってやろうか」

「え？」

何かの聞き違いかと思ったよ。

「欲しいんだろう？」

「昔のことだよ」

「昔ね」

みどりのおじさんは薄ら笑いを浮かべながら、横断歩道と平行に黄色い旗を伸ばした。

グルグル回る電波時計ってやつは、意識して見ると回っていない。学校で話題になっているあのテレビコマーシャルだって、見たいと思ったときには見られない。そして、気を緩めたときに急に流れるもんだ。

なんだってそう。思いもしない時にやってくる。  
「弟ができるかもね」  
ママはいつもより忙しく顔を叩きながら、鏡越しに俺を見た。  
「え？」  
何かの聞き違いかと思ったよ。  
「欲しかったのよね？」  
昔のことだよ。  
そう言い掛けて口をつぐむ。  
不意にみどりのおじさんの顔が浮かび、ボクは頭を振るう。続いて、無人になった横断歩道を思う。  
壁掛け時計を見上げれば、針がグルグル回っていた。

## ぼっきらぶう

仕事帰りの疲れた身体をテーブルに落ち着かせる。すると、なんだか機嫌の悪い妻が音を立てながら皿を差し出した。思い当たる節はないが、珍しいことではない。なにかとややこしい世の中だから仕方がない。なんて勝手な理解で自分を納得させる。  
杓文字をカンカン鳴らしながらご飯をよそうその背中に向かって小さく呟いた。  
「ぼっきらぶうだなあ」  
妻の動作がピタリと止み、ゆっくり首だけを回して俺を見る。眼球を揺らし口元をひきつらせながら目一杯に腕を伸ばす。少しでも俺に近づきたくないというような素振りで茶碗を差し出した。  
「先に寝るわ」  
そして、寝室に消えた。  
翌朝、俺は関西営業所に向かうべく、眠ったままの妻を残して、未明のうちに家を出た。  
俺の願いは当たり前のように叶わず、いつもの風景に足を踏み出す。都心の機能は正常に作動し、残念ながら時間通りの新幹線に俺を運んだ。  
前々から予約しておいた窓際A席の最後尾に腰を下ろし、背もたれをいっぱい倒す。続いて、携帯電話のアラームをバイブレーションに設定して胸ポケットに差し込んだ。眠る準備は万端。シートにもたれて目を閉じると、途端、妻の姿が浮かんだ。口元をひきつらせながら目一杯に腕を伸ばしたあの姿。  
「なんだよ。ありや」



眩くと同時に携帯電話が震え出し、咄嗟に胸ポケットを掴む。

俺の携帯が鳴るのには大凡いくつかのパターンがある。アラームが鳴る時、電源が残り僅かである時、そして、妻からのメールが届いた時。

この時間帯を考えれば、答えは一つしかない。多少の緊張感とともに携帯電話を取り出す。画面に目を落とすと、俺は小さく首を傾げた。そこにはどこか見覚えのある鳥のマーク。イトーヨーカドーからダイレクトメールでも届いたかしら。しかし、セブンアンドアイになってからマークが変わったような。ヨークマートなんてイタリアカラーのヤツもあったよな。なんて思いを巡らせているうちにふと気付く。

「あああ」

思わず大きな声が漏れ、三人掛けのB席を挟んでC席の女が怪訝な顔で俺を見た。つるんとした白い顔の眉間に皺が刻まれ、俺は反射的に頭を下げる。俺には女を怪訝な顔にさせる才能があるのかもしれない。

そのマークは、かつてアカウントを取得したまま放置していた Twitter のそれだ。大きな災害があった時にこの手のコミュニケーション手段があったほうが良いと聞いて、妻と一緒にアカウントをとったのだった。

どうやら俺宛にメッセージが届いたようだ。時折、得体の知れない相手からフォローされることがあったが、メッセージが届くは初めてだった。不慣れな手つきでなんとか本文に辿り着く。

そこにはたった一言だけ記されていた。俺はそれをなぞるように眩く。

「ぶっきらぼうでしょ」

俺は首を傾げる。一拍おいてそれに応答する。

「ぼっきらぶうだろ」

口にすると何か違和感を覚え、唇を巻き込んで強く口を閉じる。チラリC席の女を眺めると、眉間の皺は消え、健やかな寝息を立てていた。途端、俺も眠気に襲われる。目尻に女を捕らえたまま視界がぼやけていった。

携帯電話が震え、咄嗟に胸ポケットを掴む。

寝起きで迎えた関西会議は、その大半を聞き漏らす。午後には、想像力を発揮しながら、メールで送られた議事録を必死に理解する。それでも、何とかやっていけることは経験的に分かっていた。

隣の席では目をつり上げた所長秘書が、ものすごい勢いでキーボードを叩いている。そのリズムはハチャトゥリアンの『剣の舞』。

「なんすか、その限定的には容認するってのはっ」

声のでかい同僚はオフィスで議論を続けている。議論というより一方的に文句を垂れていると言った方が正しい。

「どっちとでも取れるようなこと言って、現場で血を見るのはこっちなんすよっ」

パソコンの陰からその様子を窺えば、気の弱い所長が腕組みしながら困り顔を浮かべていた。

再びパソコンに目を落とせば、所長は小さな声を漏らした。

「そんな、ぶっきらぼうに言うなよ」

俺は反射的に視線を戻した。所長の脳天まで及ぶ額には皺が浮かび『うんざり』と描

かっている。俺は首を傾げてから隣の彼女に首を伸ばした。

「ぼっきらぶうだよな？」

途端、『剣の舞』が止み、彼女は大きな音を立てながら椅子を引いて立ち上がった。所長は好都合とばかりにこちらに首を伸ばす。

「なんだ？ なんだ？」

彼女は後ずさり、背後のキャビネットにもたれて、片手で口元を押さえながら俺を指さす。俺は状況が飲み込めず、チャックでも開いていたのかと股間に視線を落とす。特に問題はない。彼女はその場にしゃがみ込んでしまい、胸を押さえながら呼吸を整えた。

「どうした？ どうした？」

声のデカイ同僚が彼女の元に駆け寄り、肩に手をかける。

「おまえ、何をしたんだ？」

所長は椅子に挟まったまま身動きがとれないのか、その場で首を伸ばして俺に問いかけた。

「いや、何も。ちょっと彼女に聞いただけっすけど」

「何を？」

すると、所長秘書の声がオフィス中に響きわたった。

「駄目、駄目、駄目、駄目、駄目えええっ」

尻の重い所長もついに立ち上がり、のそのそと全速力で駆け寄った。

「一体、何したんだよ」

そして、同僚は声のデカイ男としての調子を取り戻す。

「彼女に何をしたあああっ」

いわれなき非難に動揺していると、胸ポケットの携帯電話が震えた。俺は驚いて背筋を伸ばす。そして、またメッセージが届いたこと察知する。

「あのお」

「なんだ」

「なんだあああっ」

いちいち声のデカイ同僚に嫌気がさし、俺は鼻からゆっくり息を吸いあげる。そして、力強く吐き出した。

「ぼっきらぶううえあああっ」

途端、所長の顔がみるみる赤くなる。続いて、白目をむきながら額ともとれる脳天から湯気が立ち上がる。そして、笑い声ともとれる咆哮を轟かせた。

いま、火星に行きます

夜空を見上げて、一番輝く星を探す。今になって思い返してみても、俺がはじめて好きになった女の子はやっぱりヨモギだった。

ヨモギは火星語で大きな瞳を意味する。

ヨモギは小学校二年の一学期を終えると転校していった。学校に馴染めなかったことが問題だったのではないかと思う。幼稚園は一緒になかった。卒園アルバムを見返しても、軟体動物のような形をしたヨモギの姿は見あたらない。小学校の卒業アルバムにしたってヨモギの姿は残っていなかった。

三〇歳を迎えた年、小学校の同窓会が行われるという通知が届いた。幹事を務める差出人の顔を思い浮かべると少し嫌な気分になったが、返信用ハガキの「出席」ばかりに目が行く。俺はひとまず辛うじて年賀状でつながっている旧友に連絡をとることにした。

「久しぶり。なんか案内来なかった？」

「ああ来た来た。久しぶりに携帯におまえの名前が出てきたから、金貸せとか言われるのかと思ったよ」

「おまえだけには借りん」

その後、当時流行った漫画やシールのお話だけで三〇分も電話を続け、お互い同窓会に参加することになった。

そこで、俺は恐る恐る切り出す。

「ヨモギ来るかなあ？」

「誰だそれ？」

そして、慌てて言葉を探す。

「れ？ 中学ん時のヤツだったかな？」

「そうか」

「きっとそうだ。じゃあ今度な」

電話を切った後、あいつとは中学校も同じだったことに気付く。

ヨモギは日本語を話さなかった。というより、そもそも声を持たない。見た目はやはり頭足類に近く、いくつも延びた触手の一本を駆使してコミュニケーションをとった。

俺がはじめてヨモギとのコミュニケーションを試みた時、それは校庭脇の体育倉庫の中、はじめにその滑らかで冷たい触手を耳に入れてみた。ガサゴソとくすぐったい音がして、俺はいくらか幸せな気分になったが、ヨモギの気持ちは何も伝わってこなかった。

続いて、口に含んでみた。ヨモギの表皮は少し酸っぱい味がして、俺は顔をしかめた。それでもヨモギは喉の奥へと触手を延ばす。俺は咳き込んでそれを吐き出した。

結果的に鼻の穴がよかった。

ヨモギは触手の一本を細く伸ばして鼻の奥へと差し込んでいく。鼻腔の嗅上皮に密着した触手が嗅覚受容神経に信号をつたえる。様々な香りとともにヨモギの思いが伝わってきた時、その喜びは何にも代え難いものだった。

薄暗い倉庫の中、跳び箱に腰を下ろして目を閉じた俺の顔を触手が這い回る。耳、口、鼻とコミュニケーション手段を探していたその時から、すでに俺とヨモギの心はつながっていたのだと思う。

そして、嗅覚受容神経を通して俺は知る。

ヨモギは火星語で大きな瞳を意味する。

目を開けば、大きな頭の真ん中でたった一つの大きな瞳が涙で滲んでいた。俺は鼻に触手を入れたまま優しく微笑んだ。

結局、同窓会にヨモギは現れなかった。それでも、懐かしい面々と再会し、随分と綺麗になった女子や、すっかり中年太りの男子らと、あのころの話をするのは楽しい時間だった。

そして、声と声が干渉してざわめく会場の中、俺は一つの声を拾い上げた。

「そう言えば、うちのクラスに変なタコみたいなヌイグルミが置いてなかった？」

俺はその声の主を探して辺りを見回すが、誰もがせわしなく口を動かしていた。

続いて、マイクのハウリング音とともに初老の教師が上座に立った。ビンタマンと呼ばれていた馬面の教師だ。宴も闌、そろそろ一言講釈を垂れたいようだ。あいつの被害を被った児童は少なくない。それでも、多少の暴力は教育の手段として赦される時代だった。一時の痛みなどすぐに消え、ビンタマンは恐れられる対象ではあったが、嫌われることはなかった。

そんな、ビンタマンも今となってはビンタ校長だ。やりにくい時代に苦労していることだろう。

校長の講釈が終わり、すっかり酒の回った幹事の男が目を閉じて、ビンタを要求した。校長は困惑顔で男の頬を優しく打った。大げさに倒れる男には苦笑いが浮かぶが、それでも同窓会を締めるには十分なイベントだった。

宴が終わり、俺は一人、夜空を見上げながら静かな方へと歩いていった。そして、一番輝く星を探す。

その時、どこ懐かしい感触が俺の頬に触れた。

「ヨモギ」

俺は眩いた。そして、勢いよく振り返れば、目の前には大きな瞳。頬に触れた触手はその先端が細く伸び、俺の鼻の中へ差し込まれた。嗅覚受容神経を通して信号が入り、俺はヨモギのメッセージを受信する。そして、目を見開いた。

はじめはヨモギの申し出に躊躇した。それでも、少し考えれば他に回答が見あたらないことに思い至る。そして、俺は微笑みながら小さく頷いた。

途端、上空から光が射し、俺の身体は軽くなる。そして、空に浮かぶ円盤状の飛行物体に吸い込まれていった。

## チロリアンハット

君はグリーンフェルト地に可愛らしい飾り紐の付いたチロリアンハットを被っていた。俺は、それが風に飛ばされた拍子にこっちに振り向かないだろうか、なんて都合のいいことを考えていた。

人差し指を一度口に含んでから天を指さす。風向きを確認してから、君を軸に時計回りで一〇分進む。風向きと言ったって地下空調によるものだ。コンクリートに囲まれた中で、帽子を吹き飛ばすほどの突風は望めない。

すると、都合良く通過列車が帽子を吹き飛ばした。それを追いかけるようにして君が振り返る。途端、俺は不躰にもカメレオンを連想した。舌を伸ばして帽子を見事にキャッチ。なんてことが起こったわけではない。

君の顔は俺が今まで見たどんな子よりも目が離れていたのだ。

帽子は二、三度舞い上がり、列車が通り過ぎるとそのまま線路に落ちた。

おそらく帽子は駅員が拾ってくれたのだと思う。「線路に物を落とされた方は駅係員にお申し付け下さい」なんて案内が柱に貼ってあるだろう。俺が駅員を呼びに言ったのだろうか。まさか線路に飛び降りたわけではあるまい。

最後に彼女は帽子を被ってから「ありがとう」と言って、離れた目を細めた。

あれから一〇年近い時が流れ、偶然にも大学に入ってから再会することとなる。

それは学生会の歓迎コンパでのことだった。

「もつ煮が好きなお男の人って多いよね」

学生会などというものに所属する予定はなかった。たまたま入学式で隣だった男に声をかけたところ、高校の三年間を生徒会に属していたなんて奴だった。

呑み会の喧騒の中で俺がその声を拾い上げることができたのは、あの時の一言を記憶していたからだろうか。俺は熱心に先輩の話に耳を傾ける男の隣を離れ、彼女のもとへ歩み寄った。そして、俺は瓶ビールを差し出し、グラスを要求する。

彼女は条件反射的にグラスを握り、俺を見上げる。そこで俺は目を瞬いた。彼女の目は記憶していたほど離れていない。グリーンフェルトのチロリアンハットも被っていなかった。彼女はグラスを差し出したまま首を傾げる。そして、俺はその場しのぎの声を発した。

「もつ煮は昔から好物だ」

お陰で俺のあだ名はモツヲに確定した。

翌朝、俺の隣で彼女は目を覚ました。

「モツヲ」と呟いて、彼女は微笑む。俺は口元を歪めて「なんじゃらほい」と応える。続いて、俺は昔話をはじめた。

「ねえ、覚えている？ グリーンのチロリアン」

彼女はしばらく間を置いてから応えた。

「なんのこと？」

どうやら俺の勘違いのようだった。彼女は誰が見ても美人の類だ。誰だってカメレオンと見紛うことはない。そして、俺が思うに、この顔にはグリーンフェルトのチロリアンハットは似合わない。

それでも彼女との付き合いはしばらく続いた。そして、彼女は俺のアパートの小さなキッチンで実に美味しいもつ煮を作った。時には学生会の連中を呼んでももつ煮パーティーを開いた。

「男ってもつ煮が好きよね」

彼女は微笑んだ。俺はモツヲとして誰よりも多くのもつ煮を掻き込んだ。

夏が一気にやってくると、俺たちはバイト代を握って夏物を漁りに出かけた。一通りの買い物を終えると、デパートの洋菓子売場のテーブルで向き合い、一つのクリームあんみつをつついた。

「ねえ、はじめて一緒に過ごした日のこと覚えてる？ モツヲは朝になってから何か聞いたじゃない」

俺は背筋が伸びる。

「なんだっけ？」

「グリーンのチロリアン」

「チロリロリン」

面倒なことをよく覚えている女だ。

「誤魔化さないでいいの。でもね、普通チロリアンって聞いて帽子を思い浮かべるヒトはいないわよ」

彼女はそう言って、千鳥屋の店舗を指差した。そこには「高原銘菓チロリアン」と書かれたパネルが置かれている。そのパネルには色とりどりのクリームが詰まったロールクッキーが並んでいた。その一つは抹茶味だろうか、グリーンのチロリアンもあるではないか。

そこで俺は気づく。つまり、彼女には通じていたのだ。

彼女は微笑みを蓄えたまま黙って俺を見つめている。俺はその顔を眺めながら、自分の目を寄せていった。

「変わったでしょ」

俺は二、三度頷いた。

「私がやったのは目頭切開法って

言うらしいわ」

「目頭？ 切開？」

「そう。そのまんま。そんな大げさに考えないでよ。切開する角度とか、長さとか、ラインなんかを決めたら、手術なんて二、三〇分で終わるのよ。一週間後に抜糸もするけどね。高校出て、春休みのうちにできちゃうわけ。大学決まってるから親も文句ないでしょ」

それから彼女は帽子を被る必要も無くなったのだという。

俺はうまく言葉を選べない。でもね、あの時確かに思ったんだ。彼女は誰が見ても美人の類だ。誰だってカメレオンと見紛うことはない。

だからそう言うことにした。

「もう誰だってカメレオンと見紛うことはない」

平手が飛んだ。

それでも彼女との付き合いはしばらく続いた。相変わらず、彼女は俺のアパートの小さなキッチンで実に美味しいもつ煮を作った。そして、彼女がはじめてもつ煮を作ったのがこのキッチンだと知ったとき、涙が溢れそうになった。

「男って大抵もつ煮与えとけば満足なのよ」

彼女は照れ隠しのように言い放った。

そんなことはないだろうよ。

彼女は誰が見ても美人の類だ。そして、彼女と体を重ねる度、離れ目は遺伝するのだろうかと考えてしまう。いつか娘を授かるようなことがあれば、グリーンのチロリアンを手に入りたい。

## あおぞら

この肉を脱いで空を飛ぶ。

おまえはあおぞらを見上げてタイミングを見計らっている。腹の周りの肉を掴んでは、時折、ため息をもらす。

こいつさえなければ空を飛べる。見えない階段を登って行くように空を飛ぶ。飛ぶというよりはあおぞらを歩くイメージ。今更、両手を突き上げてシュワッチはないだろう。大体あんまり派手なことはしたくないだよ。

おまえは大きく鼻から息を吸いあげると、口を尖らせてゆっくりとそいつを吐き出す。分子レベルで肉が消費された。何度も繰り返した挙げ句、ようやく無駄な足掻きだと気づく。

肉を脱ぐイメージは、ムキムキマッチョが力を込めるとボタンが弾け飛んで服がビリビリに破けるみたいなの、あんな風でありたい。ここは派手にいきたいのだ。

肉を脱ぐなんて、その行為自体が異常なのだから、優雅にやりようがないだろう。でもきつと、汗でべとついたシャツを体を揺らしながら脱ぎ捨てる感じ。ブルブル肉が震える感じ。

「おい」おまえは俺に問いかける。「今、笑ったろ？」

俺はおまえに目を向けて、もう一度口角を持ち上げる。

「ずいぶん出来の悪い作り笑いだな。明らかな作り笑いじゃないか」

俺は作り笑いを崩さず、首を一回転させた。

「おまえが何を考えているか、当ててやろうか」おまえは言った。

「何故こんな天気の良い日に、こんなつまらない奴と過ごさなきゃならない」

残念だが、おまえはひどい勘違いをしている。

「俺はおまえになってあおぞらを見上げていたんだ」

おまえは肉厚の眉間に皺を寄せた。皺というより、もはや溝だ。その溝がますます落ち込んで動脈を絶つ。俺は眉間から血を噴き上げるおまえを思い浮かべた。

「この肉を脱いで空を飛ぶ。肉さえなければ空を飛ぶ。見えない階段を登って行くように空を飛ぶ。飛ぶというよりはあおぞらを歩くイメージだ。今更、両手を突き上げてシュワッチはないだろう」

おまえは眉間から血を噴き上げることなく、あまりに平凡な応答を示した。

「なに言ってんだ？」

俺はため息をつく。そして、続けた。

「肉を脱ぐイメージは、ムキムキマッチョが力を込めるとボタンが弾け飛んで服がビリビリに破けるみたいな、あんな風でありたい。ここは派手にいきたい」

おまえは顎を揺らしながら、二、三頷いた。

「おまえは俺になってそんなことを考えていたということか」

「そうだ」

「そうか」

それでもおまえはたった一つの心配を抱えている。

「だから、心配はいらない」

俺は精一杯出来の悪い作り笑いを浮かべて言った。

「残念だが、おまえはひどい勘違いをしている」

俺は呆気にとられた。

「おまえも俺と同じ思いをしているものと思っていたよ」

そして、思いがけず涙した。

## 凡人のパンク愛

なんにも覚えられない。

まるで頭に入らない。

なんにも興味が持てない。

すぐに飽きてしまう。

幼少の頃には、まだ発達ショーガイなどというジャンルがなかったから、単に出来の悪い餓鬼で済まされていた。でも、そのジャンルを知ってから、ぼてっと腑に落ちた。希望が見えてきた。

「そんなこと無えよ」

あるっすよ。この出来の悪さはビョーキなんだって、ショーガイなんだって、そう言っておくれよ。

「そんなこと無いっすよ」



あるって言えよ。絶対どこかおかしいんだって。ちょっと見れば分かるだろう。立派な名の付くショーガイなんだって。

頭おかしいんじゃないのか？

遠慮なくそう言ってくれ。おまえらは他人を愚弄することが大好きだったはずだろう。それなのに、誰も何も言ってくれやしない。表現系が地味だから駄目なのか。胸板にナイフで you make me...なんて彫らないと、家畜の臓物を撒き散らしながら街を闊歩しないと、そこまでしなければ認めてくれないのか。

出来損ないの頭を必死に隠して、懸命に社会へしがみついている。至極凡庸なアティチュードをアイデンティティと言い張る。そんな風に社会と関わっている輩はいくらもいる。本当は傷だらけの胸板を曝してしていきたいのに。たまには臓物を散らしながら狂乱したいのに。

それは勇気の話だろうか。決断力が意図しない方向へ働く。保身をはかる。嗚呼。保身をはかる。

そして、一握り、ひょいと乗り越える聖痴愚がいる。凡人は週末、各種メディアでそれに触れてカタルシス。おまえより先に目に付けていたのだと意気揚々。正義に満ちた息苦しい社会に戻るため、英気を養う。

なんにも覚えられない。

まるで頭に入らない。

なんにも興味が持てない。

すぐに飽きてしまう。

それでも、再び訪れる週末に向けて、出来損ないの脳味噌をいくらか回す。

## 痴れ者のパンク愛

会社帰り、マーケットに立ち寄り、サラダ油と鳥の臓物、そして、果物ナイフを購入した。

マーケットを出たら側道を抜けて河原に降り立つ。そして、遠くに輝く街の明かりを頼りに、枯れ枝やエロ雑誌をかき集めた。

休日の大半は部屋に籠もっている。まるで集中できない文庫本とスマホを行ったり来たりしながら過ごしている。アウトドアの趣味などまるでないが、幼い頃の刷り込みというものは大したもの、一度、二度経験した飯盒炊爨によって、なんとなく効率のいい火の熾し方は身についていた。

腰掛けるに具合のいい丸石を見つけると、上着とネクタイをある程度丈のある枝に

引っ掛けて地面に突き立てた。丸石に腰を下ろし、ライターを捻って、エロ雑誌に目を通す。そして、グラビアページを千切ってはクシャクシャに丸めて地面に放っていった。続いて、そいつを寄せ集めると、細い小枝を放射状に重ねた。再びライターを捻り半裸の女に火をつける。燃え移る炎を眺めながら、少し太い枝をさらに重ねた。いまいち火の移りが悪い女たちに眉をひそめ、サラダ油を注ぐ。赤い炎が立ち上がり、少々仰け反った。

火が落ち着いたところで、発泡トレーに入った臓物を果物ナイフで適度に刻む。続いて、その先に突き刺した臓物を焚き火にかざした。

「あ、塩忘れた」

ハツを食えば鉄臭い。レバーを食えば妙ちくりんな風味が広がる。いつまでも食い千切れないテッチャンと格闘しながら、「これって大腸だよな」と、ちょっと嫌な気分になった。

多少腹が満たされ、大いに胸がムカついたところで本題へ移る。

肩間に力を込めてナイフを胸元へと持ち上げる。自傷パフォーマンスにはシャツを脱いだほうがいいか。スラックスからYシャツの裾を引きずり出し、プチプチとボタンを外していく。本番にはYシャツはふさわしくないと知り、上着と一緒に枝に掛けた。改めて肩間に力を込め、右手にナイフを握り、左手には臓物の入った発泡トレーを載せた。

ここでTシャツを破り捨てて声でもあげたいところだが、両手が塞がっているはそうもいかない。本番は上半身裸で挑むべきか。ステージ上の先人達も、確かにその多くが半裸であった。俺は丸石の上に臓物のトレーを置いて、ナイフを口にくわえたままTシャツを脱ぎ捨てた。

改めて両手に臓物とナイフ。

「元気ですかぁ」と、一声あげてみる。

どうも心と言葉が調和せず、続いて、定番の四文字英単語を叫んでみた。それもなんだかしっくりこない。思いつくまま喚き散らした挙げ句、ようやく巡り逢えた言葉。

「ゲバルトっ」

それは大学時代に、第二外国語の授業で学んだ。アインス、ツヴァイ、ドライに続いて教えられた単語だった。

独語教師は、学生活動家をねじ伏せた昔話を誇らしげに語り続ける学生会に、常々難癖を付けていた。

右にも左にも傾けないが、その響きのよさに、もう一度声にした。胸板に添えたナイフは、焚き火の炎に煌めきながら肉の油をギラギラさせている。

俺は躊躇い、ナイフを焚き火にかざした。

「炙るか」

チリチリと音を立てながら油脂が焦げて散り去る。十分に炙ったところで、ナイフを振り回す。そして、適度に冷めたところで、貧弱な胸板の前でゆっくりとナイフを引きながら臓物を焚き火に投げ込んだ。

「ゲ〜バ〜ル〜ト〜っ」

準備すべきものは理解し、大体のイメージはできた。そして、明日こそ乗り越えるのだ。

くしゃみを一つ放ってから、鳥肌の立ってきた肌にシャツを羽織った。ベルトを弛めてシャツの裾を押し込んでいると、健康診断の申し込み期限が近いことを思い出した。

## 三七歳

運動会全体練習とやらの土曜日登校。午前中で終わるから小学校まで迎えに来いと甘えたことを言うから来てやった。俺は大いに後悔している。

本来、保護者であることを示す札を首から提げて行くべきだったが、運動不足の身体に鞭を打つべくマラソンでもしながら行こうと思考したところ、その思い付きに酔いしれ、札のことなどすっかり忘れていた。

ジャージ姿で階段を駆け下り、マンションの前でなんとなく気恥ずかしい思いを抱えながら我流のストレッチで関節を解した。続いて、住宅街から逃げるように駆けていくと、気持ちのいい緑道が伸びる。俺は思いの外軽い身体に気を良くし、少々加速した。小学校の脇の道に差し掛かれば、なるほど赤白帽子を被った児童等がなにより校庭で戯れている。そいつを横目に一旦通り過ぎ、例年より短い夏の冷たい空気を裂きながら、緑道をさらに駆け抜けていった。

折り返し地点に辿り着き、少し歩こうかと減速すると、途端に疲労感に襲われた。何じゃこりゃ。嗚呼もう限界。脚が鉛のように重くなり、間違えて鉄下駄でも履いてきたかしらとを何度も足下を確かめた。

何であれ、おまえとの約束の時間にだけは間に合わせなければなるまい。俺はメロスにでもなった気分重い足を引きずった。走れ走れと頭の中で己を鼓舞する。なんかそんな芝居があったよな。小学校で演ったよ。メロスではなかった。体育館の両脇に立つその他大勢の声を浴びながらメロスではない主人公の彼奴が駆け回るの。走れ走れ。俺は彼奴になった気分その他大勢が発する声を浴びながら足を引きずる。走れ走れ。迫真の演技で苦悶の表情を浮かべる。走れ走れ。なんだか少しいい気分だ。

足を引きずりダラダラと小学校の門までたどり着くと、結果的に下校の時刻までには随分と余裕があった。俺と同じく何らかの事情で子を待つママさんも幾らかいらっしやっ。そこで俺だけ札を提げていないことも気づく。ゼエゼエと息を切らせて、苦悶の表情を浮かべながら現れた俺は、どうしたって不審な点が多い。せめてあの札さえあれば、ママさん方に「ごきげんよう」なんて声をかけることができたのに。しかし、俺には札がない。みすばらしい格好で汗を垂らすおっさんである。

そう。いつの間にやらおっさんなのだ。その存在だけで罪を背負う運命にある哀れな

おっさん。これは過剰な自意識だけの問題ではない。社会が悪い。カルチャーが悪い。一握りの悪いおっさんが生み出す負のスパイラルが善良なおっさんを追い込む。

俺にだって、この門が開けば醜く突き出た腹に食い込んでくる愛息がいるのだ。札なんぞ掲げなくたって門前で仁王立ちしてやろうぞ。俺は背筋を伸ばして息を整える。そして、腕を組んで肩幅程度に足を広げた。

いったいどれほどそうしていたらうか。目の前の門は堅く閉ざされ、時の流れは阿呆が算盤で刻んでいるかのように遅い。俺の脳味噌は次第に緊張に堪えきれなくなり、要らぬ思考が回りし始めた。

俺は確かに世間から煙たがられるおっさんという部類に属している。それでも、中程度の生活を維持し、時には嫁から感謝され、愛息の笑顔は絶えない。こんなおっさんには実にすばらしい日々なのだろう。それなのに、嫁に喜ばれても、誰に持ち上げられても、そこには違和感以外に感じ取れるものがない。きっと光の当たらない少年～青年期を過ごしてきたからなのだろう。こんな俺をよくもまあ持ち上げてくれるものだ。俺の実態はとても臆病でまるで冴えない己を隠し続けることに必死な卑劣間なのだ。

要らぬ思考は俺を追い込み、仁王立ちする両足が震えはじた。今にもその場に倒れてしまいそうだ。横倒れになって、手足を硬直させたまま陸に上がった魚のようにのた打ち回ってみせようか。「てんかんの発作が生じた」などと、ママさん方に同情を乞うてみせようか。

それがいい。所詮は世間から煙たがられるおっさんなのだ。そうしようとママさん方の立ち位置を確認すべく、ちらりと背後を伺えば、さっきまでは見かけなかった老人が、後ろ手に組んで閉ざされた門を一点に見つめていた。

そのいまいち掴み所のない表情を浮かべた老人を、思わず不躰に眺めていると、俺はあることに気づいた。

この老人、札を掲げていない。

にもかかわらず、この自然な佇まいはどういうことであろう。どこから見ても孫の帰りを迎えに来た老人、それ以外の何者にも例えようがない。そして、どこから見ても無害だ。

俺はここに光を見た。おっさんは皆やがて老人になるのだ。それは、ただひたすらに生き延びればいいだけのことであり、長い道のりの先にまだ微かではあるが確かに光を見た。

天国からたらい

彼女は好んで自分が死んだらなんて話をした。月に数度は口にしていたから、好んでいたと言っても間違いないだろう。しみったれた話ばかり聞かされているこっちの身にもなれ。俺は嫌気がさして前後の脈絡にまるで関係のない話を持ち出した。

「犬ってのは、鼻が犬なんだよ」

「なによそれ？」

話の主導権を奪い取ったかと思われたが、彼女も慣れたもんだ。

「こっちは真面目な話をしているの」

俺だって別に不真面目な話をしようというわけではない。それでも犬の鼻の話題はいつも簡単に封じられた。

「私が死んだら」の中でも、彼女の銀行口座に関しては、毎月のように話題に上がった。

「暗証番号変えたからちゃんと覚えてね。私が死んでから暗証番号が分からなかったら、たとえ家族だってお金が引き出せないんだから。銀行に全部没収されるの」

没収とは響きが悪い。俺への忠告というより、銀行に奪い取られることが気に入らないのだろう。

しかし、本当だろうか。死んだ妻の金を銀行が没収する？ その上、ATMに映し出される銀行員は、毎月のように暗証番号を変えろと言ってくるではないか。

そのため俺は定期的に「私が死んだら」を聞かされる羽目になる。その都度、俺はちょっとイラっとする切り口で、しみったれた話にカウンターを放つ。

先月なんてひどいもんだ。

「暗証番号変えたわ」

俺はすかさずカウンターを放ち、話題を変えようと試みる。

「会社で臭橙もらったよ」

実際にもらったのだ。俺は会社鞆から無造作に三粒の臭橙を取り出した。すると、彼女は見事カウンターを跳ね返した。

「ちゃんとありがとう言ったの？」

俺は目を丸くして絶句、間もなくうなだれた。俺はおまえの駄目息子か？ 彼女はとても楽しそうに口をつぐんで笑いを押し殺した。

そして、先月に続き、今月も新たな暗証番号が発表された。

「ハッピーバースデー♪ミスタープレジデント♪」

彼女は肩を揺らして口を窄めて、マリリンモンロー気取り。俺は首を傾げてから、それが暗証番号のことだと気付く。

「ケネディの誕生日？」

彼女は頷いた。

「いつだか知らんし、教えてもらったところで覚えられるか？」

「じゃあ、たまには考えてよ」

「いいにく」

「前に使った」

「よろしく」

「危険危険」

結局、俺はケネディの誕生日を覚える羽目になる。何度も復唱してみせれば、彼女は気をよくして「ハッピーブースデイ♪」と歌った。

「私が死んでもしっかりやるのよ。じゃないと、天国からたらい落とすからね」

勘弁してくれ。

犬ってのは、鼻が犬なんだよ。俺が話したかったのは、犬の共通項に関することなんだ。

ちょっとした障害で犬猫の区別がつかない人がいるんだって。俺ならチワワもセントバーナードも犬として認識できるが、それがどうしてなのかうまい説明ができない。自閉症気味で細部ばかりに目がいってしまう子は、たびたび曖昧で大まかな認識が苦手なんだそうだ。そこで、その子は気付いた。

犬の共通項は鼻の形だ。

「ちょっと興味深い話だろう」

俺は仏壇の前でりんを打つ。結局話すことのなかった他愛ない話題がたくさんある。俺は一つ思い出す度りんを打つ。

彼女の口座の暗証番号は、ケネディの誕生日から幾度か変わり、本当に覚えなくてはならない四桁が決定してしまった。しかし、どうしても通帳に手が伸びない。

「おい、番号何だっけ？」

フレームの中で笑顔の耐えない彼女に問いかける。いつか本当に忘れてしまったら、空からたらいが降ってくるのだろうか。

そいつを楽しみにしているが、彼女の努力の甲斐あって、俺はその四桁の数字を忘れられそうにない。

## でかした

パンと手を打つとかすかな手応え。ゆっくりと手を開けば、ちいさな虫虻が血の海でその糸屑のような脚を痙攣させていた。

俺はそいつを眺めながら溜め息を漏らす。そして、脹脛に爪を立てると、不意に先生の声が聞こえたような気がした。

「でかした」

思わず口元が綻んだ。

出張の度にクラスの児童たちに飴玉を買ってきた、かつての女教師。駄菓子屋でも売っているような口の中でシュワっとする「あわだま」だった時は当たりだ。しかし、気を利かせたつもりか、ご当地品を無理やり加工したような飴玉を買ってくるのがあった。

そいつが配られた時には、皆、肩を落としながら口に放り込んだものだ。

当時の教室は夏場であっても冷房器具などないのが当たり前、開け放たれた窓からよく蚊が舞い込んできた。そいつが先生の耳元を横切ると授業は中断し、彼女は目を凝らす。それは戦闘開始の合図。誰もが肩を怒らせて目を凝らした。そして、一人が手を打つと、堰を切ったように次々と手を打つ音が響いた。やはりどの道にもそれに秀でた輩がいるもので、多くの場合は蚊取君が虫虻を仕留めた。

すると、先生は一言蚊取君を労う。

「でかした」

何であれ分かりやすい特徴があるというのは大したもの、時折配られる飴玉と「でかした」の一声で、先生の存在はしっかり俺の記憶に焼き付いている。

飴玉効果も手伝って児童の間ではそこそこ人気の先生だったが、どうも保護者の間ではあまり評価が良くなかったようだ。

理由を聞かされた気もするが覚えていない。子供にしてみれば先生よりも親の言い分が正しい。あんたが駄目というなら駄目な人だったのだろう。

虫虻は未だ血の海で頼りない足を震わせている。俺は真っ赤なプールでシンクロナイズドスイミングさながら脚を突き上げる、そんな自分を思い描いた。

脚を突き出す度、心無い声が聞こえる。

「でかした」

鼻を摘まんで頭を出すと、飴玉で頬を膨らませた女教師が、やはり心無い声で言う。

「でかした」

それは確かに駄目な様子だ。

しばらく遊んでから、俺は虫虻を指で弾き飛ばした。

## 莫迦にしたわけじゃないけど

「莫迦にしたわけじゃないけど」

そんなことを言われても、こっちはまるでそんな気はしていなかった。

あれは莫迦にされたと捕らえるべき内容だったろうか。俺が鈍感すぎるのか。彼女がやたらと気にし過ぎる質なのか。酷く気難しい男と過ごしていた過去があるとかさ。何を言っても「莫迦にしてんのか」って、聞いてくる面倒な男なの。

「今日、夕飯どうする？」

「莫迦にしてんのか」

「私、酔っちゃったみたい」

「莫迦にしてんのか」

「おまえのカーチャン出臍」

「莫迦にしてんのか」

その男と過ごすようになって以来、文末に「莫迦にしたわけじゃないけど」を付けないと安心して喋れなくなったのだ。

「今日、夕飯どうする？ 莫迦にしたわけじゃないけど」

「私、酔っちゃったみたい。莫迦にしたわけじゃないけど」

「おまえのカーチャン出臍。莫迦にしたわけじゃないけど」

ふと、不安になる。俺はもしかして莫迦にされているのではないか。こっちが鈍感なだけではなかろうか。酷く気難しい男のほうが正しい反応なのではないかとすら思えてくる。

「今日、夕飯どうする？ 莫迦にしたわけじゃないけど」

「莫迦にしてんのか」

「私、酔っちゃったみたい。莫迦にしたわけじゃないけど」

「莫迦にしてんのか」

「おまえのカーチャン出臍。莫迦にしたわけじゃないけど」

「莫迦にしてんのか」

卵が先か、鶏が先か。彼女のそのいつでもニコニコしているところとかさ。睫毛がやたらとカールしているところとかさ。その辺も問題かも知れないよ。やたらと血色のいい頬紅とかさ。なんとなく酷く気難しい男の気持ちが分からんこともない。

君の形がなんだかヒトを莫迦にしているよね。

一通りの物思いを終えた後、俺はハンマーを振り上げる。

「煙草の一箱くらい給料日まで待ってよ」

そう彼女は俺に言ったのだ。

「莫迦にしたわけじゃないけど」

出来の悪い作り話に、俺は自分の頭にハンマーを振り下ろして舌を出した。



奥付

## 奥付

Puzzle 文集 7

<https://puboo.jp/book/89659>

著者 : puzzle

著者プロフィール : <https://puboo.jp/users/puzzle/profile>

感想はこちらのコメントへ

<https://puboo.jp/book/89659>

ブックログ本棚へ入れる

<http://booklog.jp/item/3/89659>

電子書籍プラットフォーム : ブックログのパブー (<https://puboo.jp/>)

運営会社 : 株式会社ブックログ



---

Puzzle文集7

---

版番号の予定

{{-  
-}}

著 者 書籍情報の編集ページから、著者情報を入力してください

制 作 Puboo  
発行所 デザインエッグ株式会社

---